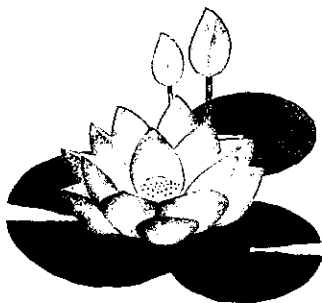


「仏教保育」ってどんな保育？



仏教保育と食べるということ

鶴見大学短期大学部教授
鶴見大学仏教文化研究所 副所長
橋本 弘道



宗教や文化による 「いただきます。」の違い

今回で第3回目の連載になります。今回は、仏教保育と食べるということについて考えてみたいと思います。私たちは、食事を頂くときに「いただきます。」と言って食事を取りますよね。毎日、当たり前のように言っている言葉ですが、この言葉には、どのような意味があるのか仏教保育の視点で改めて考えてみたいと思います。

食事に対する文化的、宗教的な違いを例に出した方が分かりやすくなると思いますので、キリスト教のような一神教での食事に関する考え方と比較してみたいと思います。皆さんも欧米の映画などで、神さまにお祈りをしてから食事を頂くシーンを目にしたことがあるのではないかと思います。神さまから頂いたものを感謝して食べるという考え方ですね。そこに、食べものそのものに対する感謝という視点はありません。なぜなら、この食べものは、神さまが、私たちが食べるために用意して下さったものだという考え方があるからです。それに対して、私たちには、食事になった生きものそのものに感謝して頂くという考え方があります。

同じ食事を頂くということでも、文化や宗教が違えばそこには大きな考え方の違いがあるわけです。

では、私たちが食べる前に唱える「いただきます。」という言葉にはどのような意味が込められているのでしょうか。諸説があるとは思いますが、「いただきます。」は、山の頂からきているとする説をここでは紹介したいと思います。山のとっぺんいだけという意味の頂です。仏教の宗派によっては、修行僧が食事をする前にお粥などの入った器を両手で頭上に持ち上げて（いただいて）から食べるという作法があります。そのように、頭上に頂くことから「いただきます。」という言葉が生まれたとする説です。

この説からもわかるように、私たちは、頂くいのちそのものに感謝して食べているということが分かります。ですから、食事を無駄にしないということも、頂きたいいのちを無駄にしないという思いに直結していると言ってよいと思います。

他のいのちを頂くことで生じる 「生きる」という責任

世の中には、菜食主義の人たちもいますが、野菜も肉も同じいのちであることに変わりはありません。

私たちは、いのちを頂くことなしに生きていくことはできません。みなさんも、日常的にお肉を食べていると思いますが、これらの、私たちが食べるために飼育されている動物たちのいのちがどのくらいかご存じですか。牛は約3年、豚は約6ヶ月、鶏は約60日だそうです。これが、家畜が人間からもらったいのちの長さです。私たちは、生きものを食べることによってしか、自分のいのちを保つことができません。ですから、これまでに食べてきた多くの生きもののおかげで自分のいのちが保たれているということ、しっかりと自覚しなければならないと思います。このような話をすると、他のいのちを奪って生きていることに対して、強い罪悪感を持つ人がいるかもしれません。しかし、そこは受け入れて生きていくしかありませんね。そうしないと、すべての生きものは生きていけないのですから。ただ、いのちを頂いているということは、自分のいのちは自分だけのものではないということ、そして、これまで頂いてきた、そして、これから頂くいのちの分まで、しっかりと人生を充実させていく責任が私たちには課せられているんだという思いを持つことが重要なのではないかと思います。

修行中の僧侶が食事の前に唱える偈文に、次のような意味のものが 있습니다。

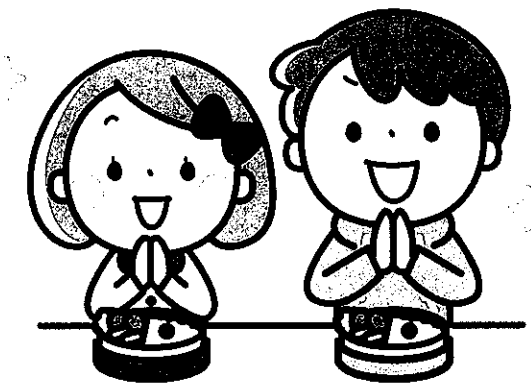
今、口に入れようとしている食事を頂くまでに、いかに多くの人の手が加わってきたか苦勞があったかということを深く考え、感謝して頂きます。

自分がこの食事を頂くのにふさわしい行いをしてきたかということを反省して頂きます。

むさぼり、いかり、ねたみの三つの毒をおさえ、平安なところで頂きます。

食事は単に空腹を満たすためではなく、私たちのからだどころを整えるよい薬ですから、正しい目的を持って頂きます。

この食事は、自らの使命をまっとうするためにいただきます。



他のいのちを頂く意味を 子どもたちと共有する

今回の文章を書いていて、ふと、ある園での出来事を思い出しました。二人のお友だちが、それぞれ、ザリガニと金魚を園に持ってきて飼ったときの話です。この二つの生きものを園児たちはとてもかわいがっていたのですが、ある日、金魚が死んでしまいました。すると、ある子はその金魚をザリガニに食べさせてしまったというのです。金魚を持ってきた子はひどく泣いてしまい、親御さんも、悲しんでいる様子を見て残酷なのではないかと思ったり、どのように対応したら良いのだろうと悩まれたようです。

先生方ならこの出来事に際して、子どもたちとどのような話し合いをするのでしょうか。どれが正解ということはないのだと思いますが、残酷さを子どもたちに説くというよりは、「きっと、金魚さんのいのちが、ザリガニさんのいのちの一部になって、ザリガニさんの体の中で生きていると思うよ。だから、金魚さんの分までザリガニさんを大切にしようね。」などと、子どもの悲しみや複雑な思いに共感しながら丁寧に話していくことで、仏教保育の視点に立った子どもへの寄り添いができるように思います。

子どもたちも5歳頃になれば、目に見えないものの存在を想像できるようになったり、いのちという概念を理解できるようになっていると思います。そうであれば、いのちを頂くということの意味も保育者と共有できるようになっていることでしょう。

さらに、「いのちに感謝して食事を頂く。そして、頂きたいいのちは自分のいのちの一部になって生きていくということを保育者が理解しており、それを、子どもと共有できる保育、それが、仏教保育である」と言えるのではないかと思います。